

日本語研究史における副詞の位置付け

中 尾 比早子

1. はじめに

副詞についての本格的な研究は、山田孝雄から始まるといわれる。副詞は日本語文法には一品詞として独立していなかった概念であり、西洋文典からそのまま取り入れることが難しかったため、理解しにくい品詞であったと思われる。

畠 (1991) では「山田孝雄の副詞論は現在の一般的平均的副詞観の基を成している。副詞をめぐるさまざまな議論は山田説の妥当性や批判をめぐる議論であったといっても過言ではない」と述べている。山田の副詞論が重用されるのは、機能面からの分類を試みた点にある。山田の分類は副詞について正面から取り組んだ研究であったため、その後の副詞研究を牽引することになる。

さて、副詞研究の蓄積から、現代語の副詞については『日本語文法大辞典』で次のように定義されている。

- 1 職能 文節構成能力－自立語、構成する文節の職能－単一の職能。原則として連用修飾語だけになる。但し、程度副詞は、体言や情態副詞を修飾限定する。
- 2 形態－活用しない。
- 3 意味機能－主として用言の意味の限定、陳述の補助、といった性質を持つ。

副詞の種類によって、連用修飾だけでなく連体修飾はごく一般的に用いられる(例：ますますのご活躍、折角のお誘い)。さらに副詞の中でも陳述副詞(呼応表現をもつタイプ)は連用修飾をしているのか、という問題があり、統一的説明するのは困難である。とはいえ、なぜ「副詞＝連用修飾」といわれるようになったのか。これには西洋文典から「副詞」の概念を取り入れた経緯を考えねばならない。

本研究では、「副詞」という概念がいかにして日本に取り入れられ、定着するに至ったかについて明らかにする。

2. 「副詞」という用語の定着

「副詞」という概念は、他の文法用語とともに西洋文法から入ってきたものである。矢澤（2003）において「副詞は、洋式文典によって、初めて品詞として立てられたカテゴリー」であるという。明治初期にはすでに「副詞」という品詞が定着していたが、その内容については、翻訳の形でそのまま取り入れられたため、日本語の副詞の現状と対応しきれていない面もあった。

2. 1 蘭文典における名称

オランダ語の学習は長崎通詞を出発点としてはじめられ、最初は口から口への学習であったという（杉本 1974）。永山（1957）には志筑忠雄『和蘭詞品考』^(註1)が蘭文典の嚆矢とみるべきものと位置付けられており、オランダ語の文法、特に品詞の概念や動詞の時制などを研究し、文法用語を確立したと述べられている。副詞は「傍語」^(註2)とされる。

先にあげた『和蘭詞品考』と『六格前篇』『訂正蘭語九品集』『蘭学凡』は志筑が唱えたところによる同系統の文法書である^(註3)（蘭文典一覧については表 1 参照）。

表 1 蘭文典と「副詞」用語一覧

著者	文典名	成立年	用語
志筑忠雄	和蘭詞品考	1798（寛政 10）頃	傍語
志筑忠雄	蘭語九品集	不明	形動詞
藤林普山	蘭学逕	1810（文化 7）	附添るの辞
藤林普山	訳鍵	1810（文化 7）	附添ルノ辞
羽栗洋齋	六格前篇	1814（文化 11）	副詞
馬場佐十郎	訂正蘭語九品集	1814（文化 11）	形動詞
藤林普山	和蘭語法解	1816（文化 12）	添言
H. ドーフ	道訳法爾馬	1816（文化 13）	形動詞
大槻玄幹	蘭学凡	1816（文化 13）	加添詞
鶴峯戊申	語学新書	1831（天保 2）	形容言
H. ドーフ	和蘭字彙	1855（安政 2）	形動詞
遠田著明	和蘭文典前編譯語筈	1856（安政 3）	添辞
飯泉士讓撰	和蘭文典字類	1856（安政 3）	副詞
小原亨	挿譯俄蘭磨智科	1857（安政 4）	副詞
（著者未詳）	訓点和蘭文典	1857（安政 4）	副詞
大庭雪齋	訳和蘭文語	1857（安政 4）	副辞
小川玄籠訳	窩蘭麻知加訓訳	1857（安政 4）	副詞
香処閑人	和蘭文典便蒙	1857（安政 4）	副字

羽栗洋斎『六格前篇』は「副詞」と名づけた最も早い書である。「bywoorden ト云フコレ大抵陪名詞ニ同シキ詞ニシテ但彼レハ正名詞ニ標シコレハ業詞ニ標スルノ別アレドモ其共ニ形容ヲナスニ至テハ一ナリ」と説明があり、「形容をなす」点で名詞にかかっても動詞にかかっても機能は変わらないと述べる。例文の副詞該当箇所をあげると「よく」「忽に」「精しく」「最」などがあり、形容詞の連用形も含む。

馬場佐十郎『訂正蘭語九品集』^(註4)では「動作ヲ形容シ又事物ノ性質等ヲ云ヒ顯ス詞ナリ但シ前ニ出ス虚靜詞ハ実詞ニカカリ此ノ bywoorden ト云ハ動詞ニカカルモノヲ云フ」として「多少」「大」「十分ニ」「夥く」などをあげ、「形動詞」と名づける。「形容」する対象は形容詞は名詞に、副詞は動詞に、と述べる。文法用語としての「副詞」は、それぞれが提案しており、志筑からは受け継ぐことはなかった。機能に関する表現は「形容する」が共通して使用されている。

一方、志筑の文法書とは系統を異にした蘭文典の原書を訳したと思われるのが、藤林普山『和蘭語法解』^(註5)である。動詞に添えられる語として「添言」と命名する。

是活言^(註6)ニ附添シ。其用ヲ形容スル所以ノ言ニシテ難易多少昨今朝暮始終彼此曉再滴々卒然等ノ類ナリ。蓋シ活言ノ主与奪ノ三格ニ関ル所ニ在テハ。之ヲ活言或ハ助言ノ下ニ置キ。活言ノ役格ニ係ル所在テハ。役格ナル名言或ハ代言ノ下置ナリ。

そして、羽栗や馬場と同じく「形容スル」という説明を施している。意味によって細かく十八分類されており、このうち「禁添言」は「別テ・コト勿」「絶テ・コト勿」の例があげられ、文末表現とセットで捉えられていたことが確認できる。

さて、鶴峯戊申『語学新書』の内容を検討する。蘭文法を無理に日本語にあてはめた結果失敗に終わったが、西洋文典によって解こうとした試みとして評価できる書である。『語学新書』では九品九格に分類し、いわゆる「副詞」には「形容言」という名称がつけられている。その内容は以下のとおりである。

雪が白くふる虫が悲しく鳴くナドイフトキノ白く悲しくノ如ク、スベテ用言ノ活ラクサマヲアラカジメ形容スル辞ナリ。シクシク泣くキヤラキヤラ笑ふナドイフ辞コレニ同ジ。此二十八等アリ。

ここでは形容詞と象徴詞を含む。「形容言」の挙例では形容詞の連用形に突出している。しかし、注目すべきは「虚体言」^(註11)で、「白き」を例にあげ「白き雪」「雪白し」の説明の後、加えて「いと白しいとど白し最も白し極て白しナドヤウニイヘバ最階

トナルナリ」とあり、「形容言」には含まれないが「最階」の意味をもつ一連の語群が存在したことが確認できる。

成立年代は不明であるが（『語学新書』よりは後か）、鶴峯戊申『洋文翻訳便覧』の中で「副詞」の名称を使用している。杉本（1974）は『『語学新書』で副詞を〈形容言〉としながら、同氏の『洋文翻訳便覧』（写本・年次未詳）では〈副詞〉となっている点は注意されよう」と述べる。

時代は少し下り、飯泉士讓『和蘭文典字類』（1856）では品詞を十分類し、「副詞」と名付けている。同年遠田著明『和蘭文典全篇譯語筌』には「添辞^{テンシ}」とある。「副詞」の名称が出現するが、江戸末期には定着まで至っていない。この他、『訳和蘭文語』（1856）によれば、「副辞」とあり、「副辞ノ名ヲ冒セル者ハ、夫ノ動作、窘困、姿容、等ノ形状情態ヲ示シ、若クハ亦タ性質ヲ詳示スルノ用アル者ナレハナリ」と定義され、「形状情態を示」す機能をもつことがわかる。分類は13分類である。「他辞ヨリ転シタルコト分明ナラサル者ニシテ本来ノ者トシ…」とあり、他品詞から転用されたものがあると指摘したうえ、「多辞ヲ合併シ或ハ成語ヲ略セル副辞アリ」として、副辞が語の単位によるものだけではないことを示している。挙例は「初メニ」「別ニ改タメテ」「次第次第ニ」がある。

副詞を表す用語はオランダ語では“bywoorden”といい、『波留麻和解』の対訳によれば“by”（側），“woord”（言語），“en”（辞）である。このため、「添言」「副詞」は直訳と考えられるが、「形動詞」に関しては「機能を心得てのこと」と杉本（1974）は述べる。また、「副詞」の一般化は時代的には安政3年前後であると推定する^(註12)。

文法用語に関していえば最終的に普山の訳出したものは定着せず、むしろ長崎通詞の訳出した「副詞」のほうが現代に受けつがれた。

2. 2 英文典における名称

英学の出発はオランダ通詞の兼修に基づくため、蘭・英文典は相互に交渉があったと考えられる。日本ではじめての英和辞書『暗厄利亞語林大成』（1811）には巻頭に品詞についての説明があり、「形動詞」としている（下線は筆者）。（英文典・辞典類一覧については表2参照）

形動詞は諸の動作ヲ形容する詞にして劇シク早ク等と凡て動詞の上に属すること之なり、然れとも諸厄利亞に於ては是を動詞の下に附く又虚静詞の如く使用

表2 英文典と「副詞」用語一覧

著者	文典名	成立年	用語
本木正栄編訳	諳厄利亜語林大成	1814 (文化 11)	形動詞
渋川敬直訳	英文鑑	1840 (天保 11)	添旁辞
ロブシャイト	英和対訳袖珍辞書	1862 (文久 2)	副 辞
村上英俊	英語箋	1863 (文久 3)	添 字
堀達之助	改正増補英和対訳袖珍辞書	1866 (慶応 2)	副 辞
足立梅景	英吉利文典字類	1866 (慶応 2)	副 詞
柳河春三	洋学指針	1867 (慶応 3)	副 詞
J. C. ヘボン	和英語林集成 (初版)	1867 (慶応 3)	Fukushi
青木輔清編述	英文典便覧	1871 (明治 4)	副 詞
石橋政方	改正増補英語箋	1872 (明治 5)	副 詞
アーネストサトウ、 石橋政方	英和俗語辞典	1876 (明治 9)	fukushi
ロブシャイト原著	英華和訳字典	1879 (明治 12)	勢字 フクシ、ソヘコトバ
島田豊纂訳	附音挿図和訳英字彙	1887 (明治 20)	副 詞

するこそそのあり即劇シク早くと云べきを劇キ風早キ馬と言へるが如し

「動作ヲ形容する詞」とする「形動詞」は「動詞の上に属する」という。

『英文鑑』^(註13) (1840) は本格的な英文法書として日本で最初のものである。「添旁辞」とあり、「動辞添名辞ニ附属シ或ハ他ノ添旁辞ト連続シテ其性質形容ヲ言フ辞ナリ」と解説する。「善く」「悪く」のような形容詞も含まれる。

古田 (1962) が「英学の場合は、蘭学ほど模索の段階は少ない。今度は蘭学を基礎として英学を理解しようとしたわけであり、その間の年次はずっと凝縮されている。しかも入門期学習過程における文法書の必修ということはそのままに受けつがれ、明治に及んだ」と述べるように、蘭学での用語が定着するまでの期間より、はるかに短い期間で「副詞」にたどりついている。

『英吉利文典』(1862) は英語で記述されているため、用語としては不明である。“adverb” についての問答が書かれており、定義としては “An adverb is a word that shows manner, situation, quantity, time or affirmation and denial.” とあり、以下、要約するとラテン語からきたものだけということ、一般に語の末尾に “-ly” がつくこと、副詞は長いモードの表現に置き換え可能であること、^(註14) と記述される。

足立梅景『英吉利文典字類』^(註15) (1866) は江戸の蘭学の上に英学が築かれたことを実証する資料として重要なものである。「副詞」と訳されている。英文典ではこの書以後「副詞」が定着した。つまり、蘭学において 1863 年から定着しつつあった「副詞」

を『英吉利文典字類』に持ち込んだことにより、英文典においても「副詞」という名称で定まっていくことになったものと思われる。

翌年『洋学指針』(1867)においても「副詞」と名付けられ、「常ニ動詞ニ副ヒテ形状ヲ詳ニスルモノナリ」という説明がある。ここに記されるのは「動詞」に副語である、ということである。『改正増補英語箋』(1872)においても同様に「動詞ニ副テソハ事物ノ形状ヲ鮮明ニスル者ナリ」と定義されており、「副詞」という名称がつけられている。

日本人のまとめた英文典のはじめといわれる『英文典便覧』(1871)においても「副詞」の名称がみえる。

なお、『和英語林集成初版』(1867)において“ADD”は「Awaseru; soyeru; k'waszru」とあり、“VERB”は「Hataraki Kotoba」とされている。“ADVERB”自体は「Fukushi」と訳されている。「そえる」は直訳で、漢字表記としては「副」「添」がある。従って「副詞(辞)」「添詞(辞)」などと訳されるのは自然なことである。

解釈が「動詞に添える」という認識になるのはやむを得ない。蘭学においても英学においても、動詞を形容する、というのが副詞の機能である。特に英語の場合、名称で“verb”と限定されているため、日本語の現状を取り入れるところまでいかなかったのであろう。例えば、英語で副詞といえば“-ly”という決まった語形をもつため、語構成の面からみても、機能の面からみても、曖昧さのない明確な品詞である。一方、日本語の場合、語形は一定しておらず、連語や他品詞からの転用から成り、統一が図れないうえに、形容する対象は動詞のみならず、形容詞、形容動詞、副詞、名詞など多品詞にわたることが、副詞の研究を遠ざける一因となったことは否めない。

2.3 国学の流れ

江戸時代、国学の文法研究の中ではどのように捉えられていたのだろうか。富士谷成章『挿頭抄』では、「言葉に三つの位を定む。一つには挿頭。二には装。三つには脚結(註16)なり」として品詞分類を行った。構文上の職能という点から副詞は「挿頭」に入れている。「挿頭」は一般に「副用言」(註17)とするものがその中心となっており、感動詞や接頭辞も含まれる。今日でいう副詞の項目をいくつかあげると、「あまり」「あやにく」「いと」「いまだ」「かねて」「かならず」「なほ」「まして」「大かた」などが

ある。挙例から判断すれば、「体言・用言の外にあり、また助詞と全く異った性質をもっている一類をば、常に他の主要語の上に冠して用いられるという特性を以て、その範疇に属すべきもの」とし、「彼の創見」であったという(藤原1973)。矢澤(2000)は「副詞を助詞や助動詞と同類のものとする扱いは、漢文法の「助字」の考えを踏襲したものと考えられる」という。工藤(1993)にも「ことばをたすく」るものとして「かざし・あゆひ」を一括している点では三分類とも言えるが、その点は、実兄の皆川淇園の『助字詳解』等の「実字 虚字 助字」の三分類に一致し、「かざし」を別に立てる点は、伊藤東涯の『操觚字訣』の「実字 虚字 助字 語辞」の四分類に一致する。」と述べる。つまり、品詞分類については「今一つの流れがあり、主として漢学から出たと思われる虚字・実字という名称がそれである」といい、富士谷成章の品詞分類に対して暗示を与えたことが少なくないと分析する。

鈴木胤は『言語四種論』(1824)において、語の分類をし、さらに「てにをは」を六種にわけた。鈴木胤のテニヲハは感動詞、体言の一部、副詞の一部、動詞、助動詞等が含まれる。その中で「詞ニ先ダツテニヲハ」に副詞接続詞にあたるものを含めている。挙例は「ハタ」「又」「イデ」「アニ」「ナドカ」「ソモソモ」「マダ」「ナホ」である。

ところで、現代語において一つの語が複数の品詞にまたがることもある。例えば「さらに」の場合、副詞と接続詞がある(『大辞林 第二版』三省堂)。

【副 詞】 程度がより増すさま。いっそう。もっと。「一上達する」

【接続詞】 前文を受けて、その程度・段階を進ませるような後文を付け加えるときに用いる。それに加えて。引き続き。その上。「予選は通過した。一優勝目指してがんばろう」

現代語を考えてみても、副詞と接続詞や、副詞と感動詞が同じ語形で使用されるのは珍しいことではない。むしろ厳密に分類することのほうが難しいことさえある。

以上の背景から考えると、日本人のことばのとらえ方として、今でいう副詞、接続詞、感動詞は同等であると思われる。

2. 4 外国人の手による日本語文典

外国人の手による日本語文法書(先にあげた蘭文典、英文典を除く)について、とりあげる。ロドリゲス^(註18)『日本大文典』(1604-8)の副詞の項目説明には、以下のよ

うにある。^(注19) (下線は筆者)

この国語は副詞を甚だ豊富に持っている。而もそれらは事物の状態を極めて生々と表すのである。何故かといふに、ただに動作の状態を示す副詞があるばかりでなく、事物の音響・挙動までも示すものがあるからである。

波線部よりポルトガル語において副詞本来の用法である「動作の状態を示す」に加え、日本語ではそれ以外の用法も多く備えていることを示唆する。

時代は下り、ホフマン^(注20)『日本語文典』(1867)では、副詞の項目で「日本語の副詞は常にその修飾する語(動詞、形容詞、または副詞)に先行する」とし、「真正なる副詞」と「真正でない副詞または副詞的表現」の二つに大別した。その後で、意義による分類を行っている。修飾する語として動詞以外もあげているが、「真正なる副詞」が何をさしているのかは不明^(注21)である。

英語で記述された日本語文典である、チェンバレン^(注22)『日本口語文典』(丸山・岩崎1999)によれば、

日本語には本当の副詞にあたるものはほとんどない。あったとしても、ごくわずかである。英語の副詞に相当する、ほとんど全ての語は、調べてみると、その他の品詞からの落ちこぼれであることがわかる。 (下線は筆者)

とっており、真の副詞の欠如を述べている。副詞的用法として形容詞の「く」をあげているが(例; あたらしく作りました)、ほとんどが英語の副詞である“-ly”に相当するという。そして副詞と名詞が混乱した状況が把握されているものとして、「日本語の名詞は、しばしばヨーロッパ語の副詞に例えられる」と述べ、例として「今日」「充分」^(注23)「大方」などをあげる。このほか「語原学的に言えば名詞であるが、常にほとんど副詞として使われる多くの語がある」とし、その場合は「に」を伴う(例; じきに、すでに、^(注24)すぐに)。助詞がつく場合は「副詞句」であると認識していたようで、“don to / jozu ni”等があげられ、後置詞の de, mo, to, ni により作られるという。最後に、「一般的には副詞として分類されている擬声語は日本語にはたくさんある」と述べる。原文には“adverb”とあり、当時の和訳は不明であるが、副詞についての見解を述べた貴重な資料である。

2.5 明治期における日本人による文典 — 翻訳文典と大槻文彦『廣日本文典』

明治初期、特に英文典の盛行に伴い、明治10年頃までに次々と西洋文典の影響を

受けたものが編まれた。明治初期の翻訳文典においては、「副詞」の名称が定着しつつあった。

田中義廉『小学日本文典』(1874)の副詞の定義は「副詞は、動詞或は形容詞の現したる、形状情態を猶精く示すものにして、常に動詞及び形容詞に副ひたる詞なり」とし、「夙に」「夜半に」は「動作の作動を審定し」、「実に」「甚だ」は「形容詞の意味を詳示」するものであるとする。意味により13分類する。このうち「叢語副詞」には接続詞が属している。この分類に関しては矢澤(2000)で「英文典の副詞の分類に倣ったものである。渋川敬直『英文艦』(1840)と(中略)かなり重なりが見られるし、中根の分類も、いわゆる『英吉利文典』に見られる分類とほぼ重なっている」という。

中根淑『日本文典』(1876)の分類は、「作為・地位・時刻・分量・決定・非否」の六項目に区分し、それとは別に形態面から分類をしている。「副詞ハ大抵形容詞ト類似セル者ニシテ、唯其ノ語尾ト、履ムベキ語トヲ異ニス、其ノ類四アリ、第一ヲ変ゼザル者、第二語尾ニクニ含ム者、第三後詞ノニヲ履ム者、第四動詞ヨリ変ズル者」と語構成で分けた。例としては「唯」「浅ク」「明ニ」「行ク々々」など、そしてこれらの外に「最(いと)モ」「多クハ」など種々の後詞を履くことがあるという。この分類をみると、形容詞や形容動詞の副詞的用法があげられている。また、副詞の性質から「正用副詞」と「変用副詞」に分類する。「正用副詞」は「必動詞ノ上ニ副フテ、以其ノ動詞ノ働キヲ詳ニ形ス者ナリ」と動詞に限定した用法をさすのに対し、「変用副詞」は代名詞、形容詞、接続詞、副詞に副うとしてこれを「変用」とみなしている。成句による副詞についても言及がある。

以上あげたごとく、中根の分類は意味、形態、性質の面それぞれから分類を施したものであり、当時どのような見解をもっていたのか、副詞にはさまざまなレベルのものが含まれるということについて詳細を把握することのできる文典である。英文典にならった動詞に副うのが副詞本来の用法であり、それ以外は「変用」として扱うため、日本語の副詞の現状に沿ったとらえ方にはならなかったことは否めない。

明治初期の代表的な文典で提示されたものであるだけに、その後混乱をきたすことになった。

そのような状態にあつて、大槻文彦が^(注25)国語辞典『言海』(1889-91)を出版した。大槻文彦は国学以来の伝統的な研究成果と西洋文法の方法・成果とをたくみに調

和させ、一応の体系化に成功した。永山（1957）によれば「かくて、和洋新旧いくたの曲折を経た明治前期の文典界も、大槻博士の、『廣日本文典』という一大折衷文典の出現によって、富士谷・本居二氏以後の在来の研究も、田中・中根両氏らを中心とする洋風文典の所説も、ここに適宜按配調整されて、国語学史上一時期を画するに足る著作となり、やがて次期の文法論へと進展していくのである」として、ここに収斂されると位置づける。国語辞書『言海』を著作編集したなかに「語法指南」（1889）があり、副詞の職能を次のように提示する。

副詞ハ、常ニ動詞ニ副ヒ、又、形容詞ニ副ヒ、又、或ハ、他ノ副詞ニモ副ヒテ、其意味ヲ種種ニ言ヒ添フル語ナリ

最後に「副詞ノ解、稍、繁ニ涉リテ、他ニ比スレバ、不倫ナルガ如シ、然レドモ、副詞ニハ、迷ヒ易キモノモ多ケレバ、今ハ此ノ如シ」とあり、一応は「副詞」の項目を立てたものであると理解できる。形容詞連用形の扱いは、「副詞法」として「形容詞ノ変ジテ副詞トナルモノナリ。」とあり、「善く修マル」「高く昇ル」「悪しく変ル」などの例があげられるが、形容詞からの転成は認めていない。

大槻の文法論は折衷文典といわれるが、『廣日本文典』（1897）では「富士谷成章氏が「かざし抄」ニかざしと名ヅケタル一類の語中ニ、往往、此副詞ヲ混ジテ論ジタルアレド、尚、甚ダ詳悉ナラズ」とあり、副詞については伝統的な国学流の文典から取り入れることは難しかったと思われる。大槻は『廣日本文典』で

副詞ハ、動詞ニ副ヒ、或ハ、形容詞、或ハ、他ノ副詞ニモ副ヒテ、其意味ヲ種々ニ修飾スル語ナリ。（下線は筆者）

と定義した。ここで初めて副詞の機能は「修飾する」ことにあると解いた。^(注26)さらに『口語法別記』^(注27)（1917）において、副詞の修飾関係に注目して特徴を列挙する。

- ① 一つの動詞を、二つ以上の副詞で修飾することがある
- ② 一つの形容詞を、二つ以上の副詞で修飾することがある
- ③ 一つの副詞を、一つ以上の副詞で修飾することがある
- ④ 語を隔て、動詞形容詞、副詞を修飾することがある
- ⑤ 句や文を修飾するもの
- ⑥ ・ 体言を修飾するもの
・ 外の語の意味を受けて、下の動詞、助動詞を修飾するものがある
・ 名詞、数詞、漢語を副詞とするもの

名詞漢語の下に、「に」又わ「と」を添えて、副詞とするもの

形容詞を副詞とするもの

動詞、又は動詞を繰返し、又わ、其下に「に」又わ、「て」を添えて、

副詞とするもの

句を副詞とするもの

- ・ 副詞、又わ、其語根を、名詞のように用いることがある

おそらくこれが契機となって、これ以後「修飾」機能が考察されるようになったものと思われる。

その後山田孝雄（1936）が副詞を「その観念を具体的にあらはしうることは体用二言に同じけれど、直接に文の骨子となることなし。即ち副詞は本質上体言の如く、呼格主格に立つことなく、亦用言の如く述格に立つことなし」（『日本文学概論』）と定義した。「副詞は *adverb* の義にあらずして副用語たるもの、義」とし、大槻があえて行なわなかった副詞の分類を機能面から試みた。^(註29) 西洋文典との違いを見据えて、副詞の枠組みを設定しているところに、これまでの副詞の位置付けとは異なった評価が与えられることになった。ここに副詞研究の基礎が築かれることとなる。ただし、その機能を「装定」と呼んだ。

3. 副詞研究の課題

西洋文典から副詞の分類を取り入れた呪縛は今なお続いている。大槻が使用した「修飾」の定義も明確でないままである。^(註30) 副詞研究は次第に修飾機能についての研究へと移行していく。「修飾」は被修飾の別から「連用修飾」「連体修飾」ということばを作り出した。現代では、副詞＝連用修飾という図式が定着したかのように扱われている。初期蘭文典での説明を考慮すると、体言にかかる形容詞、用言にかかる副詞、というように機能としては、副詞は形容詞と変わりがないものだという認識であった。つまり、修飾することに注目すれば副詞の枠組みを捉え直さなければならぬことになる。大槻が「句や文を修飾する」という説明をしたことをそのまま踏襲したのであって、そもそも「修飾」が用語として適切かどうか、副詞の種類の別により使用可能かどうかは検討するべきであると思われる。

近年の副詞研究では個々の語の語誌や文末制限に関する研究などが盛んに行われている。形容詞の連用形は副詞から外される傾向にあるが、どの形容詞でも連用修

飾をするわけではないだろうし、形容動詞からの転用で「に」や「と」などの助詞を使用しないものもある。品詞の転成から成り立つ品詞であることを考えると、副詞研究から活用形とは何かについても考察する必要があるだろう。連用修飾が副詞と用言の連用形とで行われている以上、双方からのアプローチが必要である。

統語と意味、機能すべての面から副詞を捉え直したうえで忠実に記述し、先入観なしで分析する必要があると思われる。

4. おわりに

副詞という概念が日本語に取り込まれていく過程を時系列的にまとめてみた。蘭文典、英文典から副詞概念を取り込み、蘭文典では「形容する」という機能をもつもので、その対象を動詞に限っていたうえ、英語“adverb”の直訳から動詞のみを修飾するものであると認識されるようになった。

大槻文彦は国学の考えを取り込むことはできなかったが、日本語の副詞の特徴を的確に捉え、その機能を「修飾する」と表現したことが後の副詞研究の基となった。そして山田孝雄によって副詞を副用語といわれる範囲までと定め、国学の成果を取り込むことに成功した。さらに機能から副詞の分類（程度副詞、情態副詞、陳述副詞）を行い、本格的な副詞研究の始まりとなった。

《参考文献》

- 大槻文彦 (1889-91) 「語法指南」『言海』(大槻文彦出版)
大槻文彦 (1897) 『廣日本文典・同別記』(勉誠社 (1980 復刻版))
保科孝一 (1911) 『日本口語法』(日本語文法研究書大成 勉誠社 2001)
国語調査委員会編 (1917) 『口語法別記』(國定教科書共同販売所)
山田孝雄 (1936) 『日本文法學概論』(宝文館)
永山勇 (1957) 「西洋文典と国文法」(『日本文法講座 2』明治書院)
古田東朔 (1962) 「品詞分類概念の移入とその受容過程」(『蘭学研究資料報告会』120 号 龍溪書舎)
藤原暹 (1973) 『鶴峯戊申の基礎的研究』(桜楓社)
橘豊 (1973) 「連体詞・副詞と他品詞の関係」(『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』明治書院)
杉本つとむ (1974) 「蘭文典についての考察」(『近代日本語の新研究』桜楓社)
石神照雄 (1983) 「副詞の捉え方」(『表現研究』37 号)

島郁 (1991) 「副詞の認定：品詞論としての副詞」(『副詞の意味と用法』日本語教育指導參考書 19)

工藤浩 (1993) 「日本語学史——文法を中心に——」(『日本語要説』第 11 章ひつじ書房)

矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」(『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店)

山口明穂編 (2001) 『日本語文法大辞典』(明治書院)

矢澤真人 (2003) 「副詞の機能」(『朝倉日本語講座 5 文法』朝倉書店)

〈資料〉

『近世蘭語学資料第 3 期 道訳法見馬』(1998) (第 1 巻ゆまに書房)

『近世蘭語学資料第 4 期 和蘭文法書集成』(2000) (馬場佐十郎『訂正蘭語九品集』羽栗洋斎『六格前篇』藤林普山『和蘭語法解』遠田著明『和蘭文典全篇譯語箋』『訳和蘭文語』飯泉士讓『和蘭文典字類』小原亨『挿譯俄蘭磨智科』『窩蘭麻知加訓訳』『訓点和蘭文典』『和蘭文典便蒙』) (ゆまに書房)

藤林普山編 (1981) 『訳鍵 附蘭学逕』(蘭学資料叢書 青史社)

(『和蘭詞品考』『蘭学凡』『洋文翻訳便覧』については杉本 (1974) 参照)

本木正栄他編訳 (1811) 『暗厄利亚語林大成』(雄松堂書店 (1976 復刻版))

杉本つとむ (1984) 『日本英語文化史資料』(『英吉利文典』(1862)『英吉利文典字類』(1866)『洋学指針』(1867)『改正増補英語箋』(1872)) (八坂書房)

杉本つとむ編著 (1993) 『英文鑑 資料と研究』(ひつじ書房)

J. C. ヘボン (1867) 『和英語林集成』初版 (明治学院大学デジタルアーカイブス)

富士谷成章 (1934) 『かざし抄』(大岡山書店)

鈴木胤 (1824) 『言語四種論』(勉誠社)

土井忠生訳註 (1955) 『ロドリゲス原著日本大文典』(三省堂)

三澤光博譯 [ホフマン著] (1968) 『日本語文典』(明治書院)

丸山和雄, 岩崎棋子訳 (1999) 『チャンプレン著「日本口語文典」全訳』(おうふう)

田中義廉 (1874) 『小学日本文典』(近代デジタルライブラリー)

中根淑 (1876) 『日本文典』(同)

大槻文彦 (1889-91) 『言海』(大槻文彦出版)

注

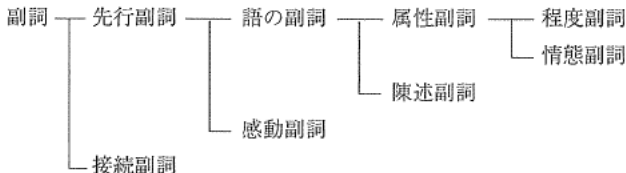
(1) 寛政 10 年 (1798) 頃の著作かと思われる (永山 1957)。天文学を修めるにあたり発見した結果を記述したものである。

(2) 永山 (1957) 古田 (1962) 参照。「大槻論文による」とある。

(3) 志筑の門に学んだのは、吉雄如淵、馬場佐十郎。羽栗洋斎は吉雄如淵の姪であり、門人である。如淵から羽栗を経て、大槻玄沢の子玄幹が『蘭学凡』を以って集大成した。

- (4) 現在でいう「形容詞」のこと。
- (5) 現在でいう「動詞」のこと。
- (6) 志筑忠雄の没後、長崎で『蘭語九品集』(志筑の門人、西某)が成る。これを訂正したもの。
- (7) 現在でいう「形容詞」のこと。
- (8) 日本で最初の刊本であり、オランダ語全体を解説した語学書として多くの人に利用された。杉本は、この書について「日本人(殊に江戸系蘭学者*)のあらわした蘭文典としてそれだけで研究の価値があると思われる」と評価する。* 蘭学研究には二つの系統があった。一つは長崎通詞で、もう一つは江戸蘭学者系である。杉本(1974)は「〈(A) 通詞 (B) いわゆる蘭語を学習し新しい西洋文化を理解しそしゃくしようとした人々〉」と述べる。詳細は P59 参照。
- (9) 現在でいう「動詞」のこと。
- (10) 序説に「師いはく…蘭に十品四格あり…戊申語名を正して諸家を折衷し論定して九品九格とす」とある。
- (11) 現在でいう「形容詞」のこと。
- (12) 文法用語全体の見通しとしては、『増補改正訳鍵』(1857)あたりが現代文法用語への近接の一転換期と考えられると、杉本は述べる。古田は、品詞分類の概念移入の全体的流れとして「品詞訳語の一定してきたのは、笈作翻刻本*の使用を通してであり、刊本でそれが示されるようになったのは安政3、4年のころからであるといえる」という。*『和蘭文典前編』(1842)いずれも同じ見解を出している。
- (13) この書は1822年に刊行された『Engelsche Spraakkunst』を翻訳したもので、渋谷敬直訳、藤井質校訂である。ともに江戸蘭学界の名家の門流である。
- (14) 例；*always means at all times, thrice is used instead of three times* など。
- (15) 薩摩藩藩医であり、英学を専門とする(鹿児島洋学校英学教師)。医者であったことから、オランダ医学を学ぶためにオランダ語に精通していた可能性は高いと思われる。
- (16) 「装」には事(動詞性)と状(形容詞性)が含まれ、「脚結」には助詞、助動詞が含まれる。
- (17) 今日でいう代名詞、連体詞、副詞、接続詞、感動詞の類をいう。
- (18) ロドリゲスはポルトガルのイエズス会宣教師であり、1577年から1610年の33年間日本に滞在した。15歳で来日したといわれる。『日本大文典』は来日してから約20年経てまとめたものである。
- (19) 原本を日本語訳してあるものから取り上げたため、当時「副詞」という名称で呼ばれていたというわけではない。
- (20) ホフマンはドイツの言語学者で、日本滞在の経験はないが当時の日本使節や留学生と接触がある。
- (21) 挙例の場合「いと」のみもとから副詞、「真実に」「完全に」「非常に」は形容動詞からの転用であると考えた方がよい。

- (22) 『A Handbook of Colloquial Japanese』 第3版 (1898) 原著による。英国の日本学者であり、東京帝国大学で博言学の初代教授を勤めた人物である。1873年に来日 1911年に離日している。
- (23) 「今日」は直訳で “this day” すなわち “to-day” 「充分」は “ten parts” すなわち “plenty, exceedingly” 「大方」は “great side” すなわち “mostly”。
- (24) この問題については山田にも言及がある。
- (25) 大槻文彦は「ことばのうみのおくがき」に「おのれは漢学者の子にて、わずかに家学を受け、また、王父が蘭学の遺志をつぎて、いささか英学を攻めつるのみ。国学とては、さらに師事せしところなく、受けたるところなく、ただおのが好きとて、そこばくの国書を覽わたしつるまでなり」と記す。
- (26) 「修飾」自体は『日本国語大辞典』第2版によれば「美しくかざること。欠点を隠そうとして、また実質以上に見せようとして、つくろいかざること」の意味で鎌倉時代成立の『吾妻鏡』（1189年記録）から使用されている語である。文法の説明で使用するようになったのは大槻以来である。
- (27) 保科孝一『日本口語法』（1911）にも「副詞わ動詞形容詞又わ他の副詞を修飾するものである。又ある場合にわ、句や文も修飾することもあるのである」とあり、「修飾する」という説明があるが、当時すぐに広まったわけではなかったようである。
- (28) 大槻文彦編集責任。
- (29) 山田の分類



- (30) 石神（1983）において「副詞は、現象的には確かに連用修飾という構文関係を構成している品詞である。しかしながら、その連用修飾がどのような構文関係のものであり、その原理はどのようなものであるのか、といった議論は今日に至るまでそれほど明確なものとはなっていないのである」と述べる。

（なかお・ひさこ / 愛知県立大学非常勤講師）